

高齢者の能力活用の現状と課題

—兵庫県高齢者生きがい促進事業を事例として—

桂 良太郎*

A Study on Development of Aged People's Capability
for Social Activities
—The Hyogo Prefecture's Experiment—

Ryotaro KATSURA

はじめに

現在わが国は、世界中のどの国々も経験したことがない超高齢社会に突入しようとしている。長い老後をどのように過すか大きくクローズアップされ、高齢者の生きがいや社会参加を高めていくことが、重要な課題となってきた。

ながい人生を有意義におくるには、なんといっても健康と生活のゆとりが必要であるが、生きがいをもつことがたいへん重要である。人生をたのしく、そしてながく生きていくためにも、高齢者の生きがい対策は今後ますます充実されねばならない。そのためにも高齢者自身の意識の変革はもとより、高齢者を支えている地域社会のあり方が問われつつある。地域社会のなかで、うずもれた高齢者の能力や知恵が今後の「地域づくり」のなかに見直されなければならない。

ここでは、今まで培ってきた高齢者の能力や技能そして知恵が十分に発揮され、明るくいきいきと活躍していけるにはどのような対策が今後必要になってくるかについて検討していくための基礎的なデータを整理することが目的である。

今まで兵庫県は全国に先駆けて、さまざまな高齢者の能力開発や活用のあり方について取り組んできた。現在兵庫県高齢者生きがい創造協会の「いなみの学園」を中心として、地域社会で特に生きがいづくりに関する指導者を育成したり、高齢者能力活用事業を展開してきた。しかしその活用事業も大きな転換期をむかえたように思われる。今後どのような高齢者能力活用事業を展開すべきか問われているところである。

本調査は、高齢者の能力活用の実態をまずきちんと把握し、その実態を踏まえて今後どのような方向性を模索していかなければならないかについて検討しようとした。そのために、このような能力活用事業を通じて、自分の能力を発揮しようとする高齢者「供給側」（一般高齢者）

と、能力を実際に活用する側「需要側」（各種団体(老人会・婦人クラブ・小学校・障害者施設・児童施設・老人施設))に分けてそれぞれの実態と意識について調査を試みた。

今後の高齢化社会の主役である熟年・若年世代にとってもこの問題はたいへん重要な課題である。この調査結果が今後の高齢化対策のあり方を検討される際の有効な資料となることを願いたい。

第 1 章

[供給側]

[一般高齢者]

1 調査の概要

- 1 調査目的 一般高齢者から見た「能力活用事業」の現状（実態・意識）と課題を検討する。
- 2 調査項目
 - 1 各種事業の認知状況
 - 2 各事業の参加または登録状況について
 - 3 参加または登録した経験者の事業について
 - 4 自分自身の能力活用のあり方について
 - 5 能力や技能の発揮したい分野について
 - 6 能力や技能の発揮の動機について
 - 7 能力や技能発揮のための促進施策について
 - 8 回答者の属性について
- 3 調査方法と調査対象
 - (1) 調査方法
アンケート方式による郵送調査
 - (2) 調査対象
県下の放送大学聴講生より地域別比例確率無作為抽出により400名を抽出した。
 - (3) 調査期間
平成3年11月から12月

2 調査結果の概要

1 調査対象者の数と属性

抽出サンプル数 400名
 回収サンプル数 320名
 有効サンプル数 318名
 回収率 79.5%

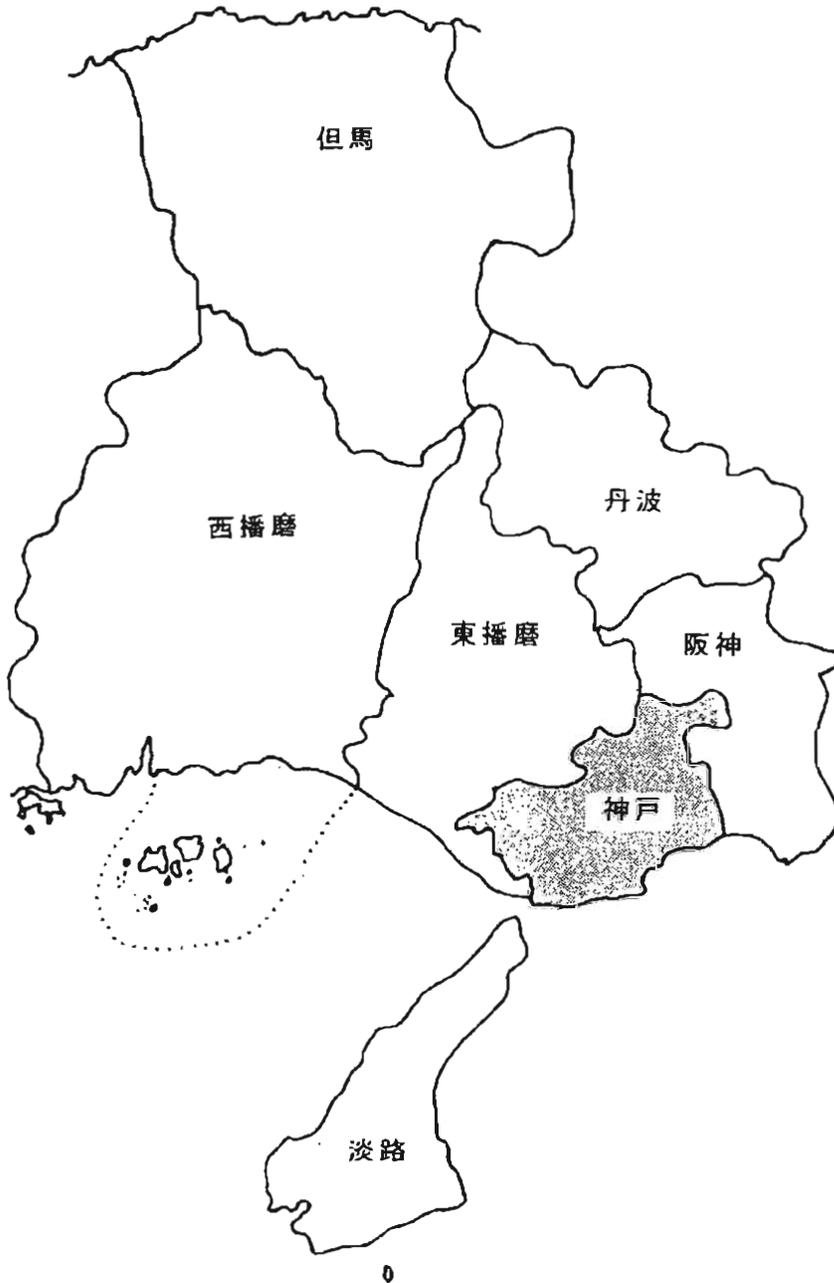
地区対象者の人数

							(%)	
神戸	阪神	東播磨	西播磨	丹波	但馬	淡路	計	
58	14	174	45	12	8	7	318	
(18.2)	(4.4)	(54.7)	(14.2)	(3.8)	(2.5)	(2.2)	(100.0)	

性別構成

男	女	N A	計
214	102	2	316
(67.7)	(32.3)	—	(100.0)

兵庫県区分略図



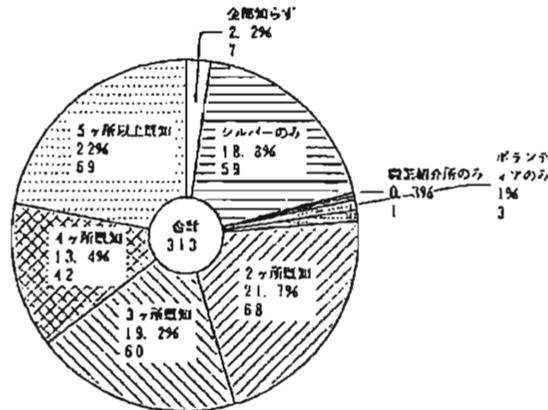
2 調査結果とその概要

1 各種事業の認知状況

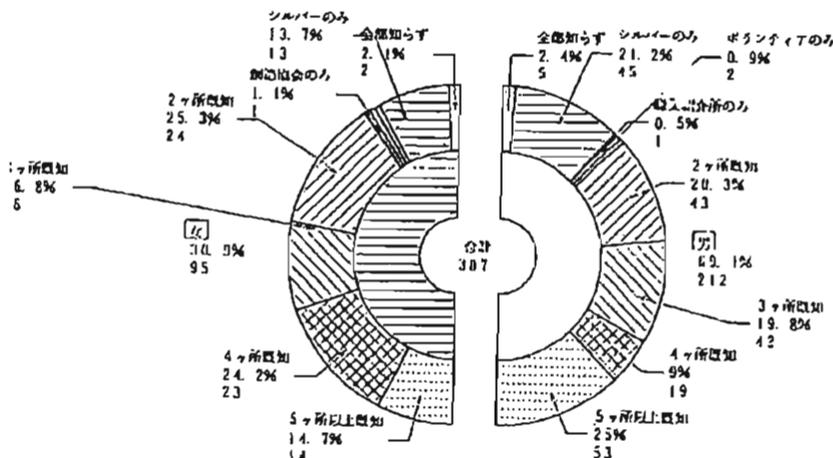
放送大学聴講生のうち93.4%の人々がシルバー人材センターを知っており、ボランティアセンターは全体の53.5%の人々が知っていた。高齢者職業紹介所は46.5%、兵庫県高齢者生きがい創造協会の高齢者能力活用事業は44.3%、高齢者職業相談室は33.3%であり、どれも知らないと答えた者は2.5%であった。

男女間では大きな相違は見られなかったが、5カ所以上知っていると答えた人は、女性よりも男性の方が少し多く占めていた。(男性25%、女性14.7%)しかし4カ所以上になると女性の方が少し多くなっていった。(男性9%、女性24.2%)。

高齢者事業の周知度



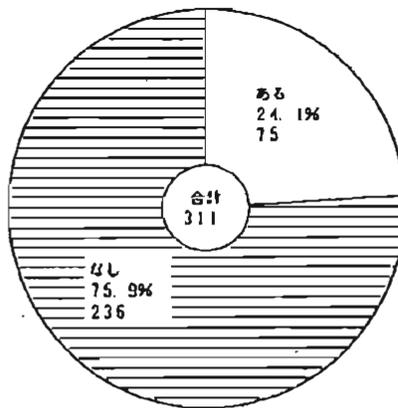
高齢者事業の周知度



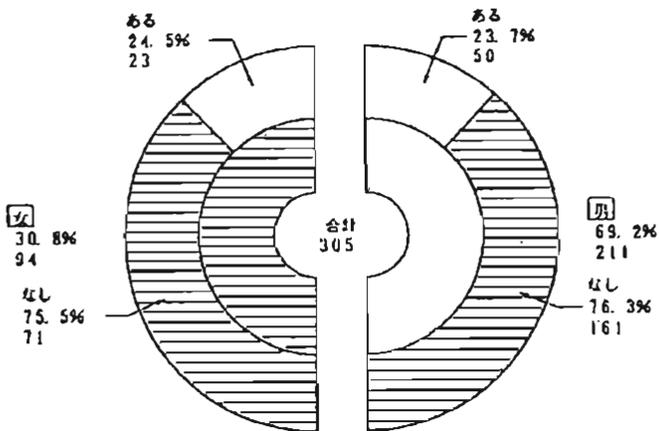
2 各事業の参加または登録状況について

いままでどれかの機関や事業に参加または登録したことがあるかどうかについては、参加または登録したことがあると答えた者は75名で全体の23.6%であった。ないと答えた者は236名の74.2%と多くの者が知っておりながら実際に参加または登録した経験をもっていないという結果であった。男女間の相違はほとんど見られなかった。

登録経験



登録経験

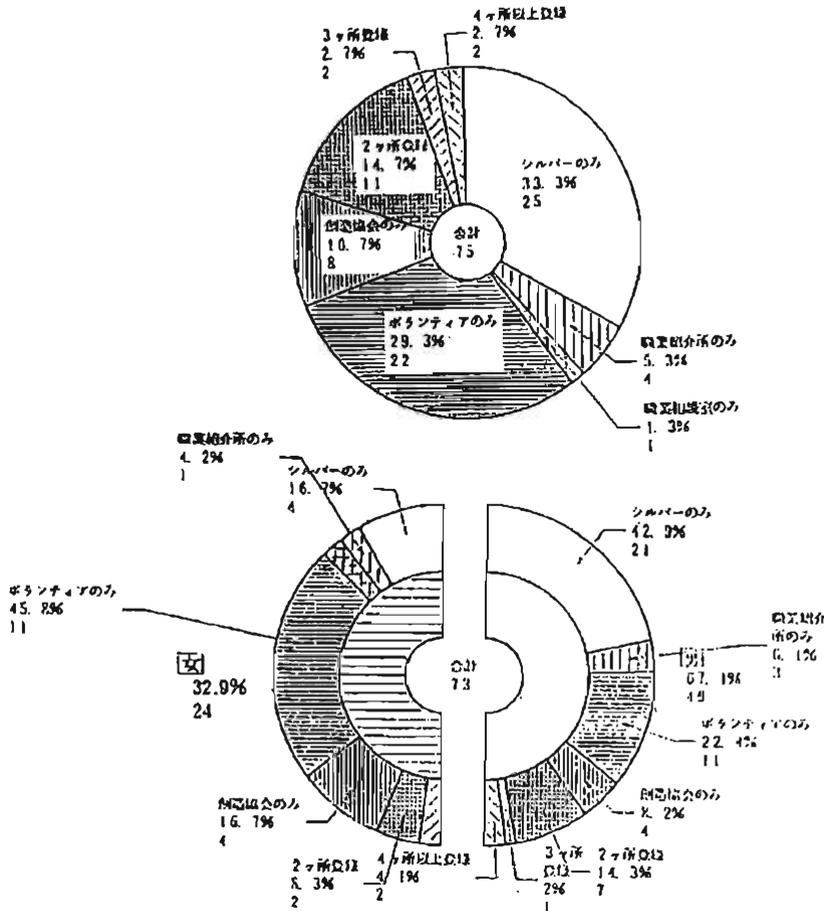


3 参加また登録した経験者の事業について

参加または登録した経験のあると答えた75名のうち、シルバー人材センターは35名(46.7%)の人々に知られていたが、本県の高齢者生きがい創造協会の高齢者能力活用事業を知っていた人々はわずか16名(21.3%)であった。ボランティアセンターは33名(44.0%)、高齢者職業紹介所は31名(41.3%)であった。

またこの75名のうちシルバー人材センターのみを知っていると答えた人は、25名(33.3%)で、職業紹介所は4名(5.3%)、ボランティアセンターは22名(29.3%)、創造協会の事業のみは8名(10.7%)であった。その男女間の相違は、シルバー人材センターのみは比較的男性に多く(男性42.9%、女性16.7%)見られた。一方ボランティアセンターのみは女性の方が多く占めていた(女性32.9%、男性22.4%)。

登録経験

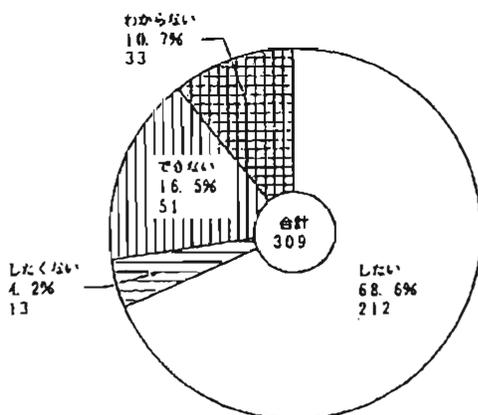


4 自分自身の能力活用のあり方について

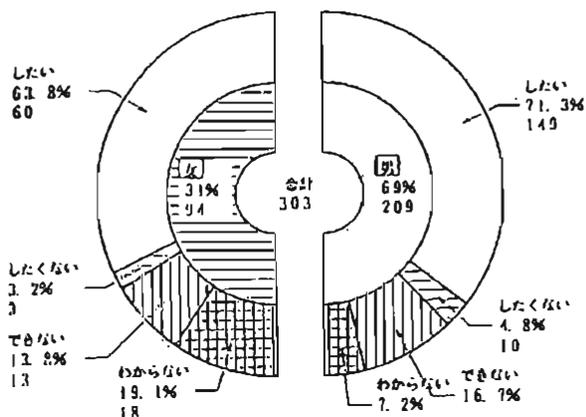
今後自分の能力や技能を社会的に発揮したいと答えた人々は全体の68.6% (212名)で、したくないは4.2% (13名)、できない16.5% (51名)、わからない10.7% (33名)であった。多くの人々がなんらかの形で発揮したいという結果が出ている。

男女間では「能力を発揮したい」と答えた人は男性が71.3%、女性63.8%とやや男性の方が少し多く占めていた。

自己の能力活用

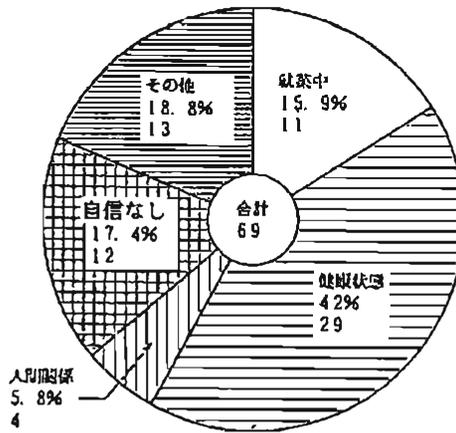


自己の能力活用

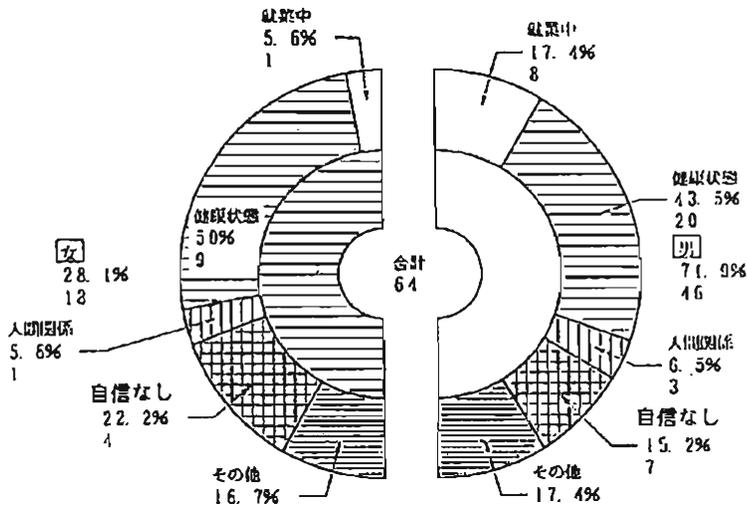


したくないまたはできないと答えた人々の理由は、それらを答えた人々の42.0% (29名) が現在の健康状態の悪化をあげており、次にその他を除いて17.4% (12名) は自信がないと答えている。現在就業中は15.9% (11名) で男性のほうが女性より多く占めており、人間関係がわずらわしいが5.8% (4名) であった。

能力活用不能理由



能力活用不能理由



5 能力や技能の発揮したい分野について

今後自分のもっている能力や技能を発揮したいと答えた212名の内どのような内容かについては、第1位は福祉活動83名（39.2%）、健康づくり52名（25.0%）、環境美化41名（19.3%）であった。

		Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	Q5活用希望	合計
		1環境美化	2福祉活動	3事務活動	4相談活動	5地域文化	6教養一般	7趣味活動	8健康づくり	9在宅管理	10家路買空	
性別	男	31人 14.5% 75.6%	52人 24.3% 62.7%	34人 15.9% 75.6%	16人 7.5% 66.7%	14人 6.5% 87.5%	17人 7.9% 73.9%	23人 10.7% 63.9%	37人 17.3% 69.8%	4人 1.9% 80.0%	29人 13.6% 85.3%	214人 66.5%
	女	10人 9.8% 24.4%	31人 30.4% 37.3%	11人 10.8% 24.4%	7人 6.9% 29.2%	2人 2.0% 12.5%	6人 5.9% 26.1%	13人 12.7% 36.1%	14人 13.7% 26.4%	- -	3人 2.9% 8.8%	102人 31.7%
合計		41人 12.7%	83人 25.8%	45人 14.0%	24人 7.5%	16人 5.0%	23人 7.1%	36人 11.2%	53人 16.5%	5人 1.6%	34人 10.6%	322 100%

対象人数 322人

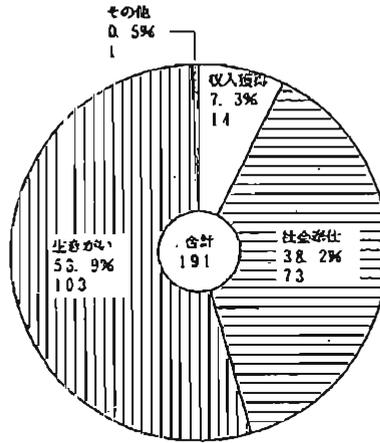
		Q5活用希望	Q5活用希望	合計
		11家事一般	12その他	
性別	男	2人 0.9% 20.0%	8人 3.7% 72.7%	214人 66.5%
	女	7人 6.9% 70.0%	3人 2.9% 27.3%	102人 31.7%
合計		10人 3.1%	11人 3.4%	322人 100%

6 能力や技能の発揮の動機について

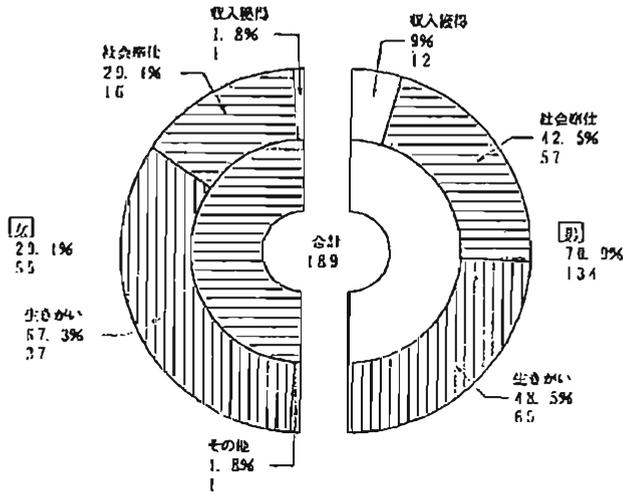
能力や技能の発揮の動機については、自分の生きがいにつながるからは103名（53.9%）、と生きがいにつながる第一位であった。社会に役立つなら無報酬でよい73名（38.2%）、社会に貢献するとともに多少の収入を得たいは14名（7.3%）であった。

生きがいに関しては男性よりも女性の方が多く（男性48.5%、女性67.3%）占めていた。一方社会奉仕は逆に女性よりも男性の方が多く（男性42.5%、女性29.1%）占めていた。

能力活用の動機



能力活用の動機



7 能力や技能発揮のための促進施策について

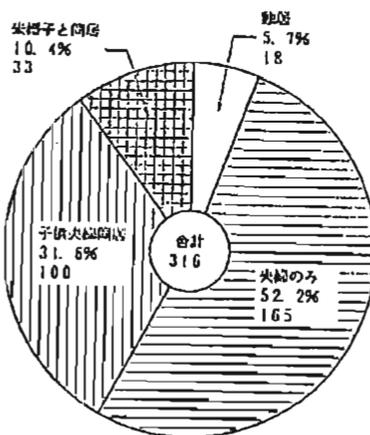
どのような施策が今後必要であるかの問いに対して、地域活動等への補助143名（45.0%）、年金制度の充実121名（38.1%）、定年制の延長97名（30.5%）等であった。

		Q7の要回答	Q7の要回答	合計						
		1 定年の延長	2 年金の充実	3 退職後施設	4 紹介制度の充実	5 訓練機関の充実	6 在宅福祉の充実	7 地域活動への補助	8 その他	
		1	1	1	1	1	1	1	1	
年 齢	60～64歳 1	16人 32.0% 16.5%	22人 44.0% 18.2%	11人 22.0% 18.6%	12人 24.0% 21.8%	15人 30.0% 19.7%	10人 20.0% 11.2%	24人 48.0% 16.8%	— — —	50人 15.5%
	65～69歳 2	31人 27.0% 32.0%	42人 36.5% 34.7%	20人 17.4% 33.9%	18人 15.7% 32.7%	34人 29.6% 44.7%	34人 29.6% 38.2%	45人 39.1% 31.5%	— — —	115人 35.7%
	70～74歳 3	32人 36.0% 33.0%	37人 41.6% 30.6%	21人 23.6% 35.6%	18人 20.2% 32.7%	15人 16.9% 19.7%	27人 30.3% 30.3%	37人 41.6% 25.9%	1人 1.1% 100.0%	89人 27.6%
	75～79歳 4	12人 30.0% 12.4%	18人 45.0% 14.9%	4人 10.0% 6.8%	4人 10.0% 7.3%	7人 17.5% 9.2%	12人 30.0% 13.5%	27人 67.5% 18.9%	— — —	40人 12.4%
	80歳以上 5	4人 40.0% 4.1%	— — —	3人 30.0% 5.1%	2人 20.0% 3.6%	4人 40.0% 5.3%	2人 20.0% 2.2%	5人 50.0% 3.5%	— — —	10人 3.1%
合 計		97人 30.1%	121人 37.6%	59人 18.3%	55人 17.1%	76人 23.6%	89人 27.6%	143人 44.4%	1人 0.3%	322人 100.0%

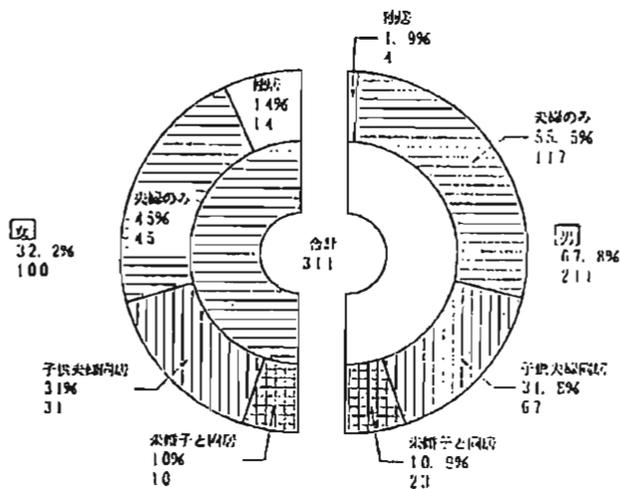
8 回答者の属性について

1. 家族構成については、夫婦二人暮らし165名(52.2%)、子供夫婦と同居100名(31.6%)、未婚の子と同居33名(10.4%)、ひとり暮らし18名(5.7%)で、女性の方が男性より多く占めていた。

家族構成



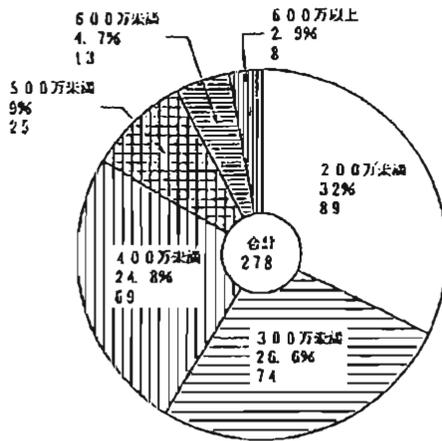
家族構成



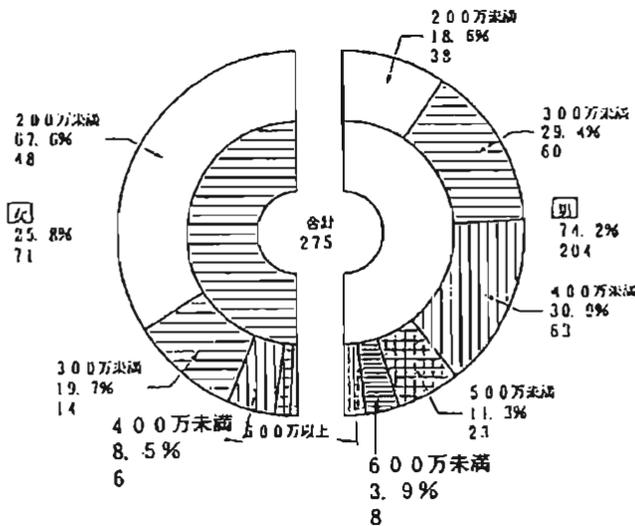
2. 年収については、200万円未満89名（32.0%）、300万円未満74名（26.6%）、400万円未満69名（24.8%）、500万円未満25名（9.0%）、600万円未満13名（4.9%）、600万円以上8名（2.9%）であった。

200万円以下は圧倒的に女性の方が男性よりも多く占めていた（女性67.6%、男性18.6%）。

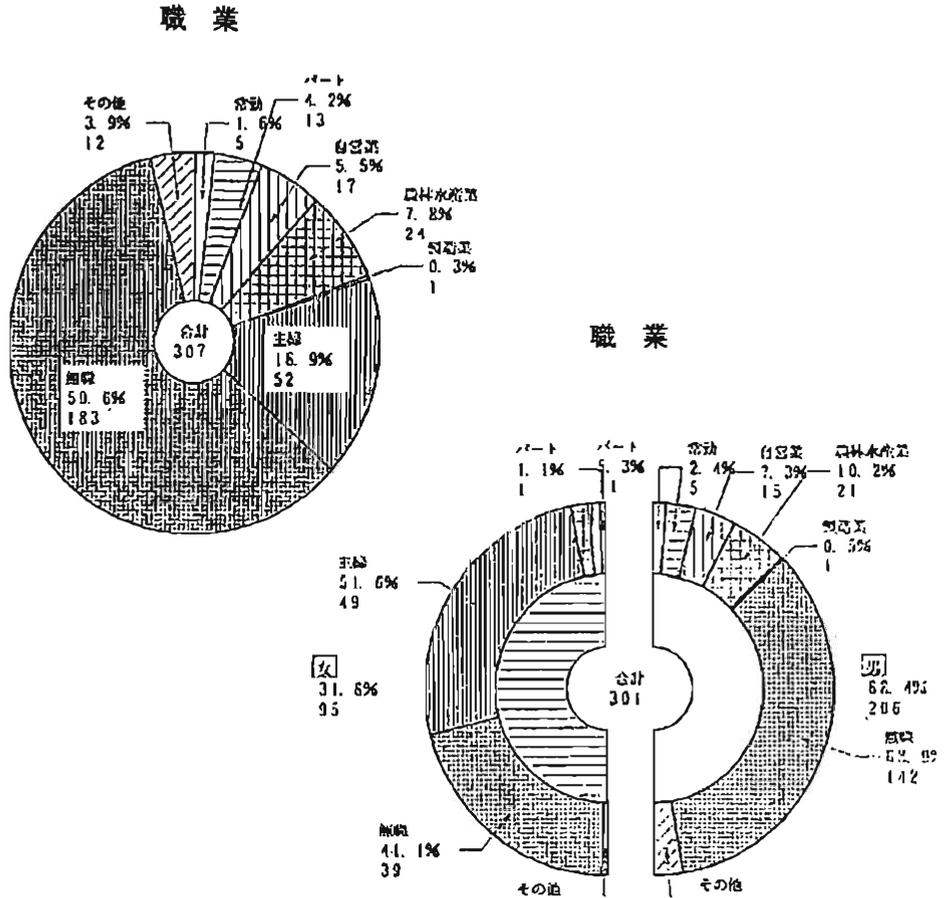
年収



年収



3. 職業については、現在勤めていない人は183名（59.6%）、主婦52名（16.9%）、農
 林水産業24名（7.8%）と全体の7割以上の人々が現在は職をはなれているという結果
 であった。



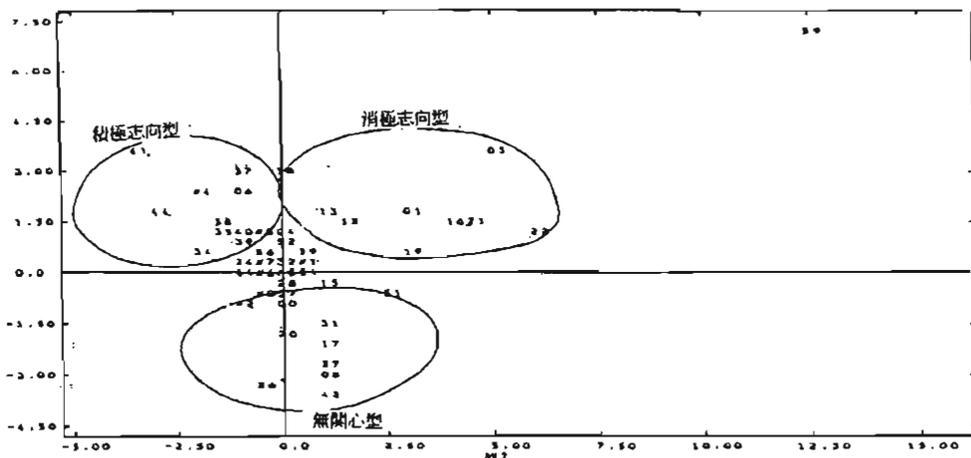
〔供給側〕の能力活用に対する捉え方と地域性との関連について

供給側からみた「能力活用事業」に対する捉え方については、ここでは一般高齢者を取り上げ、それぞれの項目を多変量解析（数量化Ⅲ類）した場合、大きく3つの類型が浮かび上がってきた。それらは、積極指向型と消極指向型そして無関心型である。（図-1）

それらの分布にはそれぞれ兵庫県下の7つの地域（神戸、阪神、東播磨、西播磨、丹波、但馬、淡路）が含まれており、それらを浮かび上がらせると（図-2）のようになる。

図-1の数字はアイテムカテゴリ変数の表を参照されたい。

図-1



(相関係数 0.352 累積寄与率 31.6%)

(アイテムカテゴリ変数)

- | | | |
|-----------------|-------------|-------------|
| 00 - 地区 | | |
| 01 - 神戸 | | |
| 02 - 阪神 | | |
| 03 - 東灘唐 | | |
| 04 - 西灘唐 | 04 - 丹波 | 05 - 但馬 |
| 06 - 摂路 | | |
| 性別 | | |
| 07 - 男 | 08 - 女 | |
| 年齢 | | |
| 09 - 60~64歳 | 10 - 65~69歳 | 11 - 70~74歳 |
| 12 - 75~79歳 | 13 - 80歳以上 | |
| Q4 A 自己の能力活用 | | |
| 14 - したい | 15 - したくない | 16 - できない |
| 17 - わからない | | |
| Q4 B R 能力活用不調理由 | | |
| 18 - 就業中 | 19 - 健康状態 | 20 - 人間関係 |
| 21 - 自営なし | 22 - その他 | |
| Q6 能力活用の動機 | | |
| 23 - 収入獲得 | 24 - 社会奉仕 | 25 - 生きがい |
| 26 - その他 | | |
| Q8 A 家族構成 | | |
| 27 - 独居 | 28 - 夫婦のみ | 29 - 子供夫婦同居 |
| 30 - 未婚子と同居 | | |
| Q8 B 年収 | | |
| 31 - 200万未満 | 32 - 300万未満 | 33 - 400万未満 |
| 34 - 500万未満 | 35 - 600万未満 | 36 - 600万以上 |
| Q8 C 職業 | | |
| 37 - 常勤 | 38 - パート | 39 - 自営業 |
| 40 - 農林水産業 | 41 - 製造業 | 42 - 主婦 |
| 43 - 無職 | 44 - その他 | |

(ダミー変数)

- | | | |
|-------------------|-------------------|-----------------|
| 45 - 1 シルバー人材センター | 46 - 2 能力開発情報センター | 47 - 3 高齢者職業紹介所 |
| 48 - 4 高齢者職業相談室 | 49 - 5 ボランティアセンター | 50 - 6 生きがい創造協会 |
| 51 - 7 いずれも知らない | 52 - 1 定年の延長 | 53 - 2 年金の充実 |
| 54 - 3 相乗り施設設置 | 55 - 4 紹介職業の充実 | 56 - 5 親戚縁回の充実 |
| 57 - 6 在宅福祉の充実 | 58 - 7 地域活動への補助 | 59 - 8 その他 |

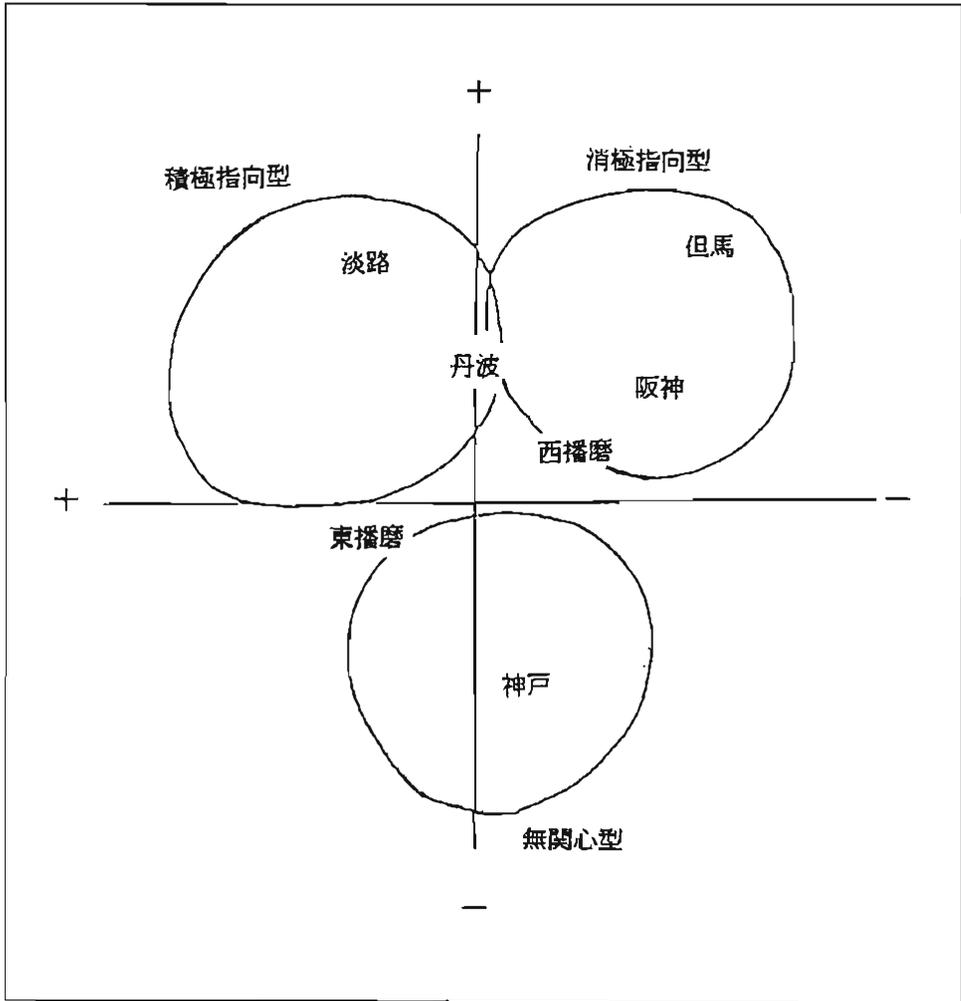
(重複値)

- | |
|---------------------|
| #0 - 02 10 |
| #1 - 03 11 43 |
| #2 - 09 25 |
| #3 - 07 33 |
| #4 - 23 36 |
| #5 - 45 47 48 49 58 |
| #6 - 30 59 |
| #7 - 46 53 55 |

図-2

〈供給・一般高齢者〉

能力活用に対する志向性と地域性



第 2 章

〔需要側〕

〔各種団体〕

1 調査の概要

- 1 調査目的 各種団体（老人クラブ・婦人会・小学校・障害者施設・児童施設・老人施設）から見た「高齢者能力活用事業」の現状（実態・意識）と課題について検討する。

2 調査項目

- 1 各種事業の認知状況
- 2 今までの高齢者活用経験の有無について
- 3 高齢者活用の際の依頼先
- 4 高齢者活用の内容
- 5 報酬の状況
- 6 活用形態
- 7 高齢者活用時の意見や感想
- 8 高齢者活用の際の希望年齢
- 9 高齢者活用する場合の報酬について
- 10 高齢者活用時の希望分野について
- 11 高齢者活用際の希望能力について
- 12 高齢者活用の際の希望依頼先
- 13 高齢者活用の際の希望分野
- 14 高齢者活用全般についての意見

3 調査方法と調査対象

(1)調査方法

アンケート方式による郵送調査

(2)調査対象

県下の各種団体として、老人クラブ、婦人会、小学校、障害者施設、児童施設及び老人施設の代表者を対象として、地域別比例確率抽出により抽出した。

対象先	阪神	丹波	東播磨	西播磨	但馬	淡路	計
老人クラブ	8	10	17	25	19	11	90
小学校	40	7	16	20	10	7	100
婦人会	9	2	10	9	5	3	38
障害者施設	10	3	4	5	3	2	27
児童施設	8	2	3	4	2	1	20
老人施設	10	2	4	5	2	2	25
計	85	26	54	68	41	26	300

(3)調査期間

平成3年11月から12月

2 調査結果の概要

1 調査対象者（団体）の数と属性

抽出サンプル数 300名

回収サンプル数 257名

有効サンプル数 254名

回収率 70.0%

（内訳）

地区別対象者（団体）の数 (%)

対象先	阪神	丹波	東播磨	西播磨	但馬	淡路	計
39	39	48	52	21	32	22	254
(15.4)	(15.4)	(18.9)	(20.9)	(8.3)	(12.6)	(8.7)	(100.0)

対象別対象者（団体）の数

老人クラブ	婦人会	小学校	障害者施設	児童施設	老人施設	計
57	30	78	34	20	35	25
(22.4)	(11.8)	(30.7)	(13.4)	(7.9)	(13.8)	(100.0)

対象団体群 教育系団体：老人クラブ 婦人会 小学校

福祉系団体：障害者施設 児童施設 老人施設

（注 今回の調査では、老人クラブを教育系に入れた）

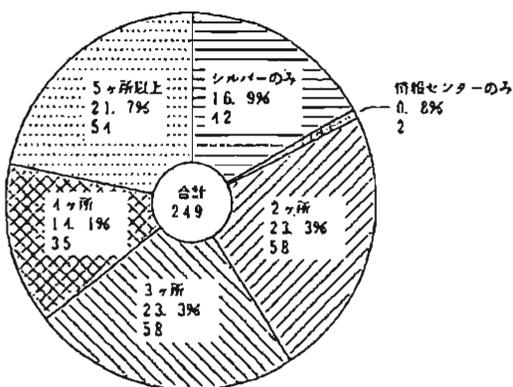
2 調査結果とその概要

1 各種事業の認知状況

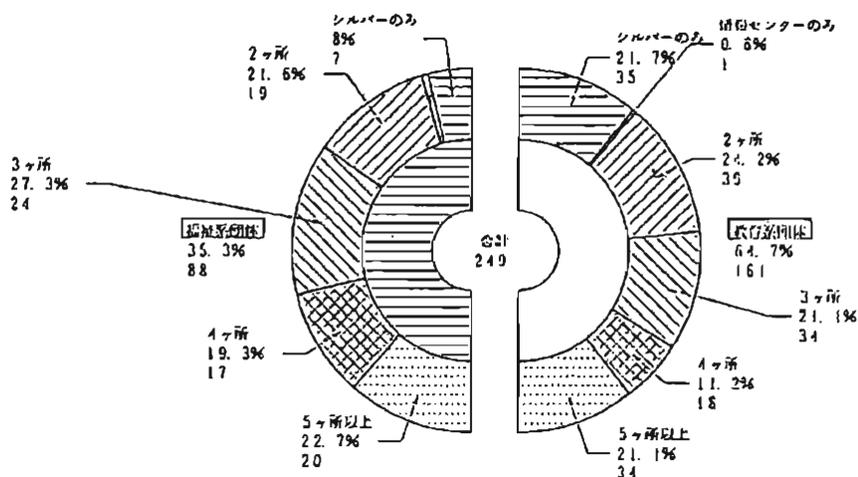
シルバー人材センターを知っているのは245名（96.5%）、ボランティアセンター169名（66.5%）、兵庫県高齢者生きがい創造協会の高齢者能力活用事業104名（41.0%）、高齢者職業紹介所103名（40.6%）、高齢者能力開発情報センター及び高齢者職業相談室がそれぞれ79名（31.1%）であった。

教育系団体と福祉系団体との相違はほとんど見られなかったが、シルバー人材センターは若干教育系の方に多く見られた。

高齢者事業の周知度



高齢者事業の周知度

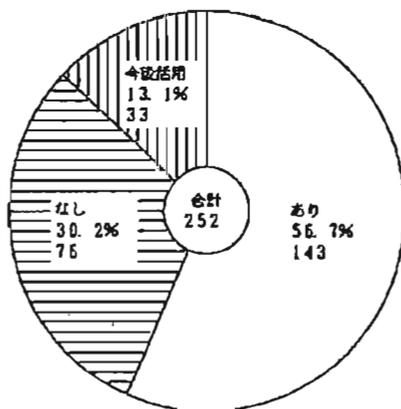


2 今までの高齢者活用の経験の有無

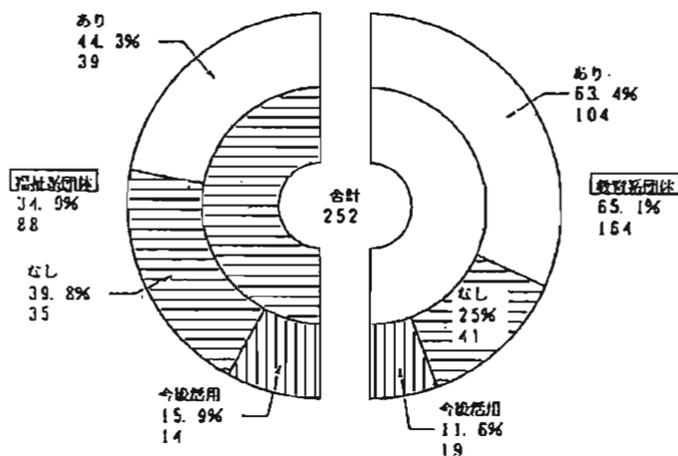
それぞれの団体で今まで高齢者を活用した経験があると答えた団体は全体の56.7% (143名)であった。ない及びないが今後活用したいと答えた団体は30.2% (76名)及び13.1% (33名)であった。

福祉系団体よりも教育系団体の方が活用経験があると答えた人が多く見られた。

高齢者の活用経験



高齢者の活用経験

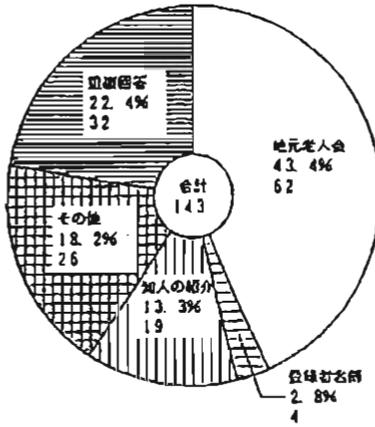


3 高齢者活用の際の依頼先

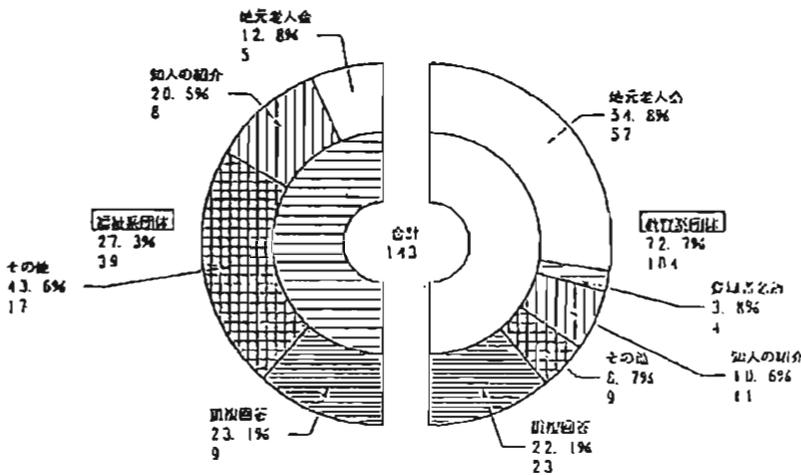
あると答えた団体のなかで地元の老人会へ依頼したのは77名(61.5%)、その他42名(29.4%)、よく知っている人の紹介が39名(27.3%)で、高齢者の能力活用登録者名簿を見てと答えた団体はわずか7名(5.0%)に過ぎなかった。ここでも登録者名簿があまり役立っていないことが示されている。

地元老人会に依頼すると答えた団体は、教育系の団体の方が福祉系の団体よりも多く、知人の紹介に依頼するなど福祉系の団体の方に多く見られた。

依頼先



依頼先



4 高齢者活用の内容

活用経験のあると答えた143名のなかで、実技指導は81名（56.6%）、奉仕作業は62名（43.3%）、交流学習58名（40.6%）であった。

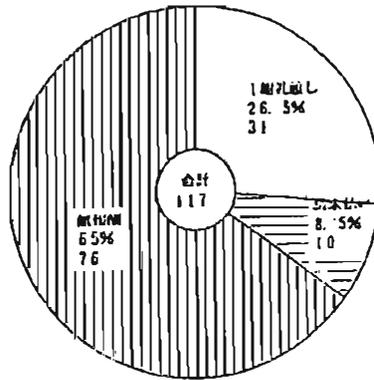
		Q4活用内容	Q4活用内容	Q4活用内容	Q4活用内容	Q4活用内容	合 計
		1 講演講義	2 交流学習	3 実技指導	4 奉仕作業	5 その他	
地 区	神 戸	5社 12.8% 9.8%	3社 7.7% 5.2%	7社 17.9% 8.6%	7社 17.9% 11.3%	3社 7.7% 8.6%	39社 15.4%
	阪 神	6社 15.4% 11.8%	8社 20.5% 13.8%	13社 33.3% 16.0%	10社 25.6% 16.1%	6社 15.4% 17.1%	39社 15.4%
	東 播 磨	6社 12.5% 11.8%	13社 27.1% 22.4%	17社 35.4% 21.0%	17社 35.4% 27.4%	8社 16.7% 22.9%	48社 18.9%
	西 播 磨	12社 22.6% 23.5%	14社 26.4% 24.1%	19社 35.8% 23.5%	14社 26.4% 22.6%	9社 17.0% 25.7%	59社 20.9%
	丹 波	6社 28.6% 11.8%	6社 28.6% 10.3%	9社 42.9% 11.1%	2社 9.5% 3.2%	2社 9.5% 5.7%	21社 8.3%
	但 馬	10社 31.3% 19.6%	8社 25.0% 13.8%	11社 34.4% 13.6%	10社 31.3% 16.1%	5社 15.6% 14.3%	32社 12.6%
	淡 路	6社 27.3% 11.8%	6社 27.3% 10.3%	5社 22.7% 6.2%	2社 9.1% 3.2%	2社 9.1% 5.7%	22社 8.7%
合 計	51社 20.1%	58社 22.8%	81社 31.9%	62社 24.4%	35社 13.8%	254社 100.0%	

5 報酬の状況

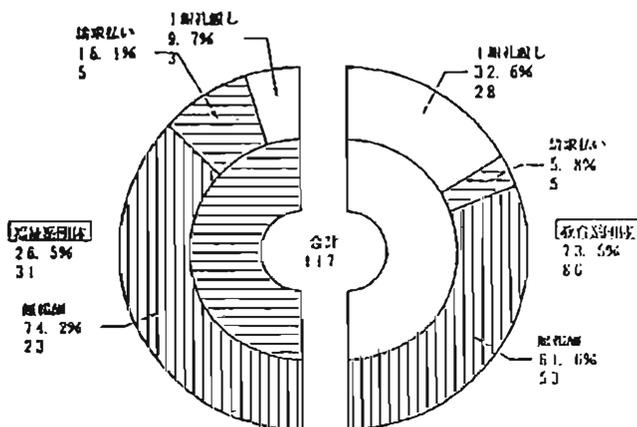
活用時の報酬については、無報酬でもらった99名（69.2%）、謝礼を渡した51名（35.7%）、請求された額を支払った18名（12.6%）であった。

謝礼を渡したと答えた団体は福祉系よりも教育系の方に多く見られた。無報酬は福祉系の方が多く占めていた。

謝礼支払方法



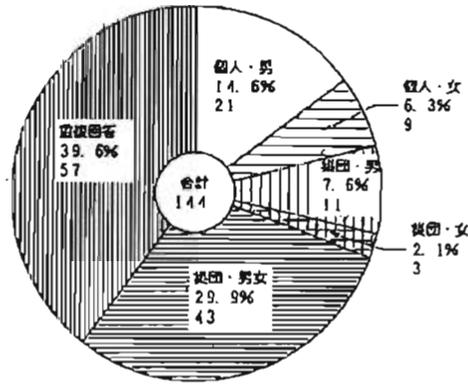
謝礼支払方法



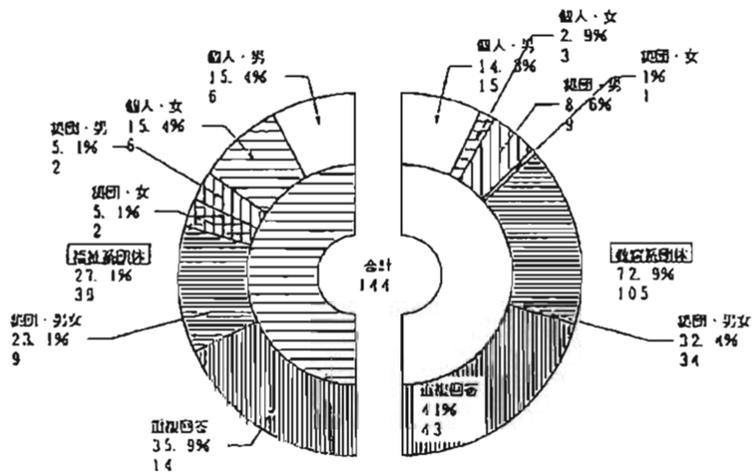
6 活用形態

活用形態としては、143名のなかで個人（男）71名（49.7%）、個人（女）37名（25.9%）、グループ（男）25名（17.5%）、グループ（女）14名（9.8%）であった。
 教育系も福祉系もさほど大きなずれは見られなかった。

活用方法



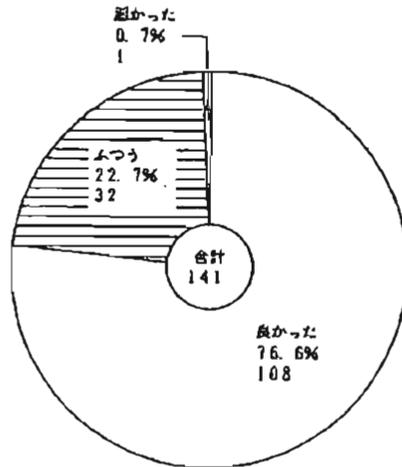
活用方法



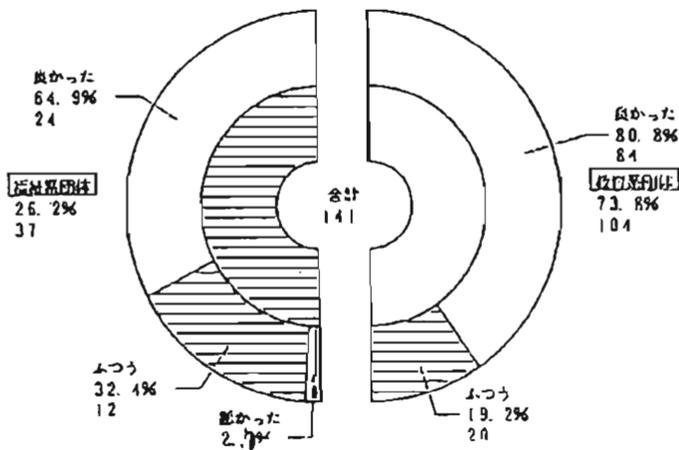
7 高齢者活用時の意見や感想

活用した経験のある143名の内、活用してよかったと答えた団体は全体の76.6%（108名）を占めており、よつうは22.7%（32名）、よくなかったは0.7%（1名）であった。具体的な意見は次のとおりである。（意見の項参照）

活用の結果



活用の結果



※ () の数字は回答者の所属団体：(1)老人クラブ (2)婦人会 (3)小学校 (4)障害者施設
(5)児童施設 (6)老人施設

〔よい評価と思われる意見や感想〕

- ・経験がゆたかで助かった(1)(3)(5)
- ・料金が割安でよかった(6)
- ・自発的に参加していただき、老人パワーには驚かされた。(1)
- ・高齢者の生き方(人柄)や知恵が、子供達のところに感動を与え、教育上大変役だった。(3)
(3)(3)(4)(1)(3)(3)(3)(3)
- ・園児や児童が自分達の地域(郷土)に関心を示すようになった(3)(3)(3)(3)
- ・高齢者の人も楽しみ、子供もふれ合い(よろこび)、特に子供の高齢者に対する意識が変化してきたことが大変良かった。(3)(3)(3)(3)(3)(3)(3)(3)(1)
- ・精神薄弱者の人たちと高齢者とのふれ合いはたいへん有意義であった(4)(4)(2)(3)
- ・高齢者との交流を通じて地域がいきいきしてきた(3)(3)(1)(3)(3)(3)(1)(3)
- ・福祉の担い手として自信をもってもらえた(1)(1)
- ・培われた体験文化を輩下に教えていただくことの必要性和高齢者の方々がそれぞれの生きがいの中での活用システムを望む(4)
- ・「招待」したので「活用」という意味ではなかったので大変よかった(3)
- ・月1回の交流を通じ双方正しく理解できる場になっているので感謝している(4)(3)
- ・高齢者の技術や創作作品にはあたたかみがある(3)(3)(3)(2)(2)
- ・高齢者は手抜きせず、誠実に仕事をしていただき感謝し敬意を表したい(1)
- ・高齢者でないと知らないことや技術について知ることができて良かった(3)
- ・ホームでは同世代に生きた者同志のあたたかいふれ合いがもてた(6)(6)(1)(4)
- ・病院での付添いを頼みたいとし、思い当たる人手がなく大変助かった(6)
- ・理論よりも実践力があり、忍耐性や奉仕の精神がみなぎっている(3)
- ・この事業の重要性を知ることができてよかった(1)(1)
- ・高齢者の心理を理解することができた(1)(1)(1)(3)(2)(3)(3)(3)
- ・高齢者を見てみると祖父母の気持ちがよくわかるようになった(3)
- ・現代は、核家族の時代であるためもっとこのような機会を増やしたい(3)

〔否定的な意見や感想〕

- ・子供達におもちゃ教室の指導をしてもらっているがこども達に積極性がなく指導者のお年寄りがかっかりしていた(1)
- ・3年生の子供にはやや理解しにくかった(3)
- ・熟練された技能をもっておられるが、児童への指導は、言葉掛けや発問などがむずかしい(3)
- ・高齢者の人の話はおもしろくなく、言葉使いがあまりにもくどいので若い人には良くなかった。(2)
- ・高齢者との交流会はよかったが、センターの事務等にかかわっている人の姿勢にいまひとつ考えさせられるところがあった(3)
- ・シルバー人材センターよりの依頼を実施したが、素人集団で全くだめであった(3)
- ・基本的な基礎能力や技術を身につけず継続しなかった(3)
- ・期待はずれで意外に報酬が高い(6)
- ・個人にもよるが、休みを多くとられて継続できなかった(6)

〔要望に関する意見〕

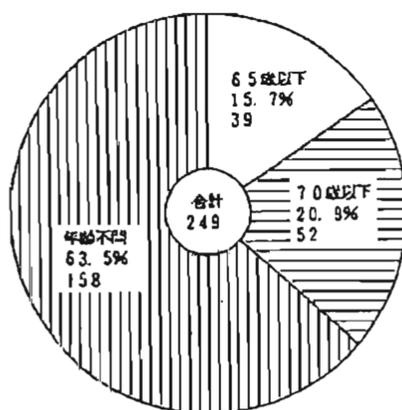
- ・ 人間的にできたひとにお願いしたい(1)
- ・ 高齢者の中には素晴らしい人材が多くいらっしゃるので、ぜひこれらの地域の宝をもっといかしてほしい(2)
- ・ 今後とも活用していきたいが、特殊な技能、技術、能力をもっているひとの名簿がほしい(3)
- ・ 広報や新聞等で事業内容をもっと随時知らせしてほしい(6)

8 高齢者活用の際の希望年齢

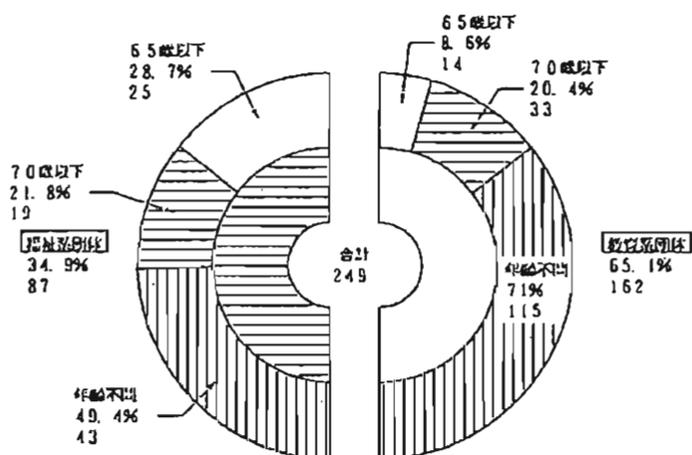
今後高齢者を活用するとしたらどのような年齢を希望するかという問いに対して、年齢は問わない158名(63.5%)、70歳以下52名(20.9%)、65歳以下39名(15.7%)であった。

65歳以下を希望するは、教育系よりも福祉系の方が多く、年齢を問わないは、逆に教育系の方が福祉系よりも多く占めていた。

活用希望年齢



活用希望年齢

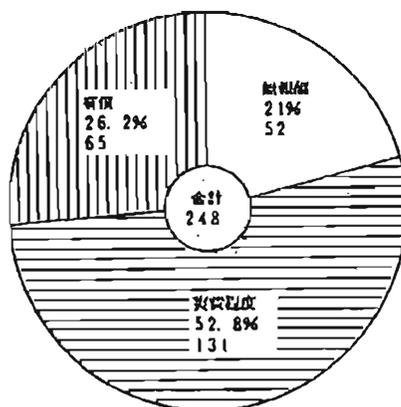


9 高齢者活用する場合の報酬について

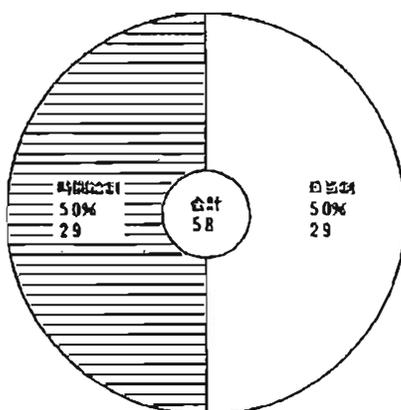
高齢者を活用する場合の報酬については、実費程度（交通費・食費等）131名（52.8%）、有料が65名（26.2%）、無報酬52名（21.0%）であった。有料と答えた65名の内一日単位でと一時間単位とする者がそれぞれ50%ずつであった。

福祉系の方が無報酬が多く、教育系の方は実費程度が多く占めていた。しかし、有償でと答えた人は福祉系の方が若干多く占めていた。

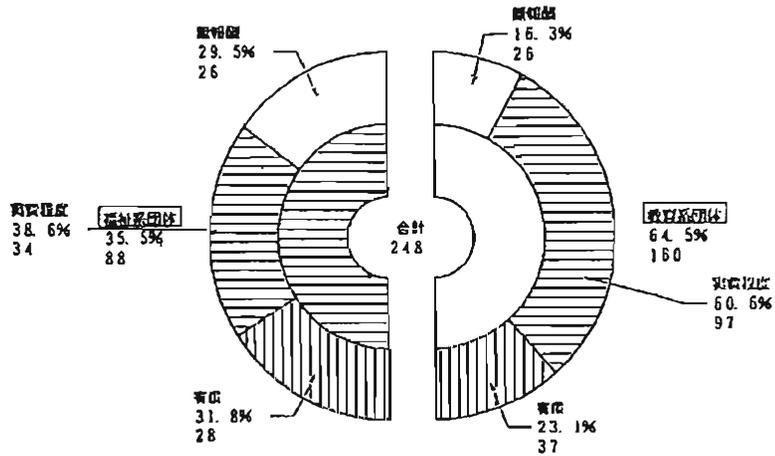
報酬について



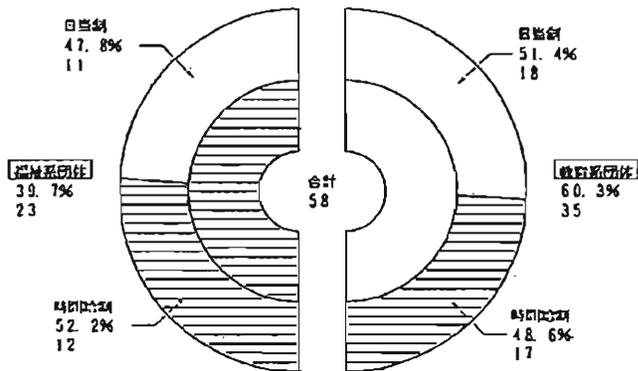
報酬額について



報酬について



報酬額について



10 高齢者活用時の希望分野について

高齢者活用時の希望分野については、環境美化（清掃・緑化・除草等）が133名（52.4%）、家庭園芸（庭木の手入れ・草木栽培）131名（51.6%）、地域文化（伝統工芸・郷土史等）130名（51.2%）、趣味活動（短歌・俳句・陶芸・書道・華道等）125名（49.2%）、福祉活動（施設訪問・社会奉仕等）111名（43.7%）という結果であった。

地域文化と答えた130名のなかで、より具体的には、郷土史は102名（78.5%）、わら細工89名（68.5%）、竹細工70名（53.8%）、郷土料理31人（23.8%）の人々が希望しているという結果であった。

また趣味づくりと答えた73名の内、個々の希望者の内訳は、高齢者のスポーツ46名（63.0%）、レクリエーション42名（57.5%）、健康づくり講話34名（46.6%）、健康体操29名（39.7%）であった。

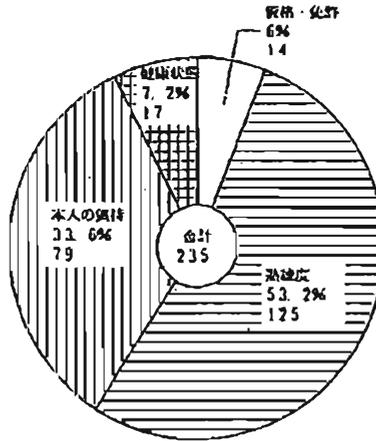
		Q10環境美化	Q11家庭園芸	Q12地域文化	Q13趣味活動	Q14福祉活動	Q15短歌俳句	Q16陶芸書道	Q17華道	Q18その他	合計				
		1 環境美化	2 家庭園芸	3 地域文化	4 趣味活動	5 福祉活動	6 短歌俳句	7 陶芸書道	8 華道	9 その他					
地区	神戸	18社 46.2% 13.8%	14社 35.9% 12.6%	3社 7.7% 2.5%	9社 23.1% 8.6%	14社 35.9% 12.6%	5社 12.6% 4.5%	16社 41.0% 12.6%	9社 23.1% 8.6%	4社 10.3% 3.7%	18社 46.2% 13.8%	4社 10.3% 3.7%	4社 10.3% 3.7%	30社 76.4%	
	阪神	17社 43.6% 18.8%	13社 33.3% 11.7%	5社 12.8% 20.8%	6社 12.8% 15.6%	16社 41.0% 12.3%	1社 2.6% 2.6%	19社 48.7% 15.2%	9社 23.1% 12.3%	8社 20.5% 19.0%	19社 48.7% 14.5%	3社 7.7% 8.1%	2社 5.1% 15.4%	30社 76.4%	
	東播磨	33社 86.7% 24.1%	20社 50.3% 25.2%	5社 10.4% 20.8%	5社 10.4% 15.6%	23社 47.9% 17.7%	7社 14.6% 17.5%	19社 39.6% 15.2%	17社 35.4% 23.3%	9社 16.7% 19.0%	23社 47.9% 17.7%	7社 14.6% 18.9%	3社 8.3% 23.1%	46社 116.9%	
	西播磨	20社 47.2% 18.8%	23社 43.4% 20.7%	5社 9.4% 20.8%	6社 11.3% 18.8%	31社 58.5% 23.8%	8社 15.1% 20.0%	30社 66.6% 24.0%	15社 29.3% 20.5%	7社 13.9% 16.7%	29社 54.7% 23.1%	8社 16.1% 21.8%	1社 1.9% 7.7%	53社 133.9%	
	丹波	10社 47.6% 7.5%	10社 47.6% 9.0%	1社 4.8% 4.2%	—	11社 23.4% 8.5%	4社 9.0% 10.0%	8社 19.0% 6.4%	4社 19.0% 5.5%	4社 19.0% 8.5%	14社 55.7% 10.7%	2社 9.5% 5.4%	1社 4.6% 7.7%	21社 53.3%	
	但馬	16社 50.0% 12.0%	18社 56.3% 16.2%	3社 9.4% 12.5%	6社 18.6% 18.8%	22社 68.8% 16.9%	10社 21.3% 26.0%	23社 68.8% 17.6%	13社 40.6% 17.8%	6社 16.8% 14.3%	16社 50.0% 12.2%	26.0% 26.0%	8社 21.6%	3社 6.3% 15.4%	32社 79.6%
	淡路	15社 58.3% 11.3%	5社 22.7% 4.5%	2社 8.7% 8.3%	1社 4.5% 3.1%	13社 59.1% 10.0%	4社 18.2% 10.0%	11社 50.0% 8.8%	6社 27.3% 8.2%	5社 22.7% 11.9%	12社 54.5% 9.2%	23.7% 23.7%	5社 13.5%	—	23社 57.7%
合計	133社 52.4%	111社 43.7%	24社 9.4%	32社 12.8%	130社 51.2%	40社 15.7%	125社 49.2%	73社 28.7%	42社 16.5%	131社 51.6%	37社 14.6%	13社 5.1%	284社 100.0%		

11 高齢者活用の際の希望能力について

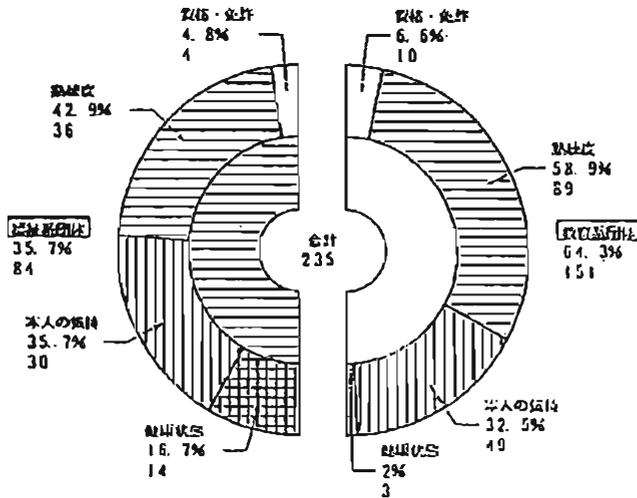
高齢者活用時の希望能力は、資格・免許は必要ないが、相当熟練していることが125名（53.2%）、本人にやる気があればよいが79名（33.6%）、本人が健康であればよい17名（7.2%）、資格・免許を取得している等すぐれた技能をもっていることを希望している人は14名（6.0%）であった。

資格・免許や熟練度は福祉系よりも教育系の方に高い割合が示されていた。

必要能力



必要能力

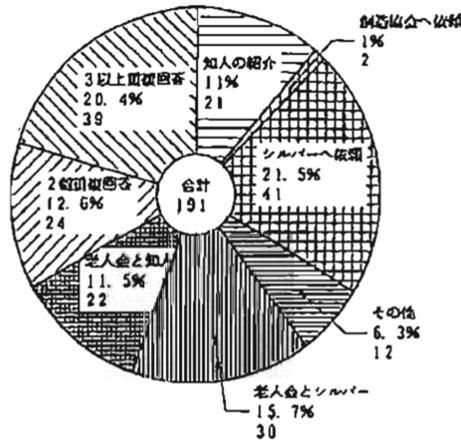


12 高齢者活用の際の希望依頼先

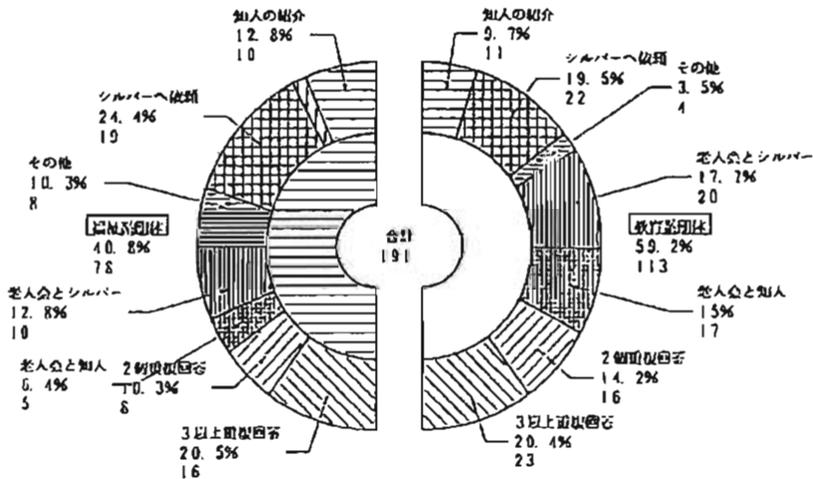
高齢者を活用する場合、地元の老人会に依頼する142名（55.9%）、シルバー人材センターに依頼する124名（48.8%）、知人に相談して紹介してもらい82名（32.3%）、そして兵庫県高齢者生きがい創造協会の能力活用事業を利用すると答えたのはわずか37名（14.6%）であった。ここにもまだまだこの創造協会の能力活用事業が十分に各団体に知られていないことが示された。

福祉系と教育系とはさほど大きなずれは見られなかったが、老人会やシルバー人材センターに依頼するは若干教育系の方に多く見られた。

採用方法



採用方法

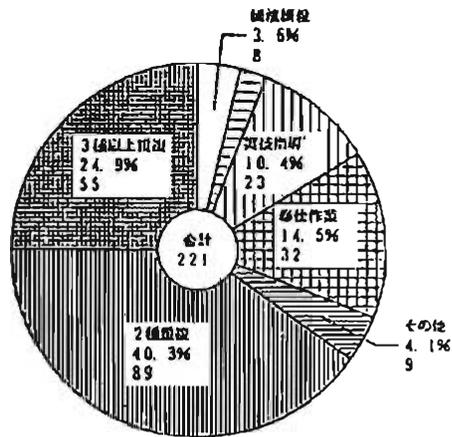


13 高齢者活用の際の希望分野

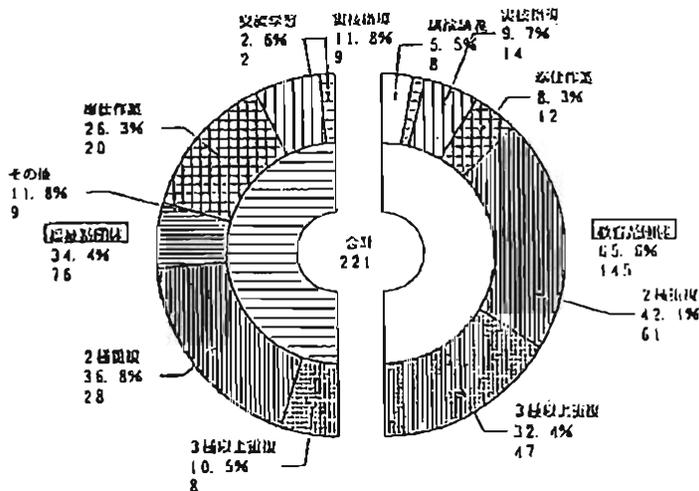
高齢者を今後活用するとするならばどのような分野に活用するかという問いに対しては、実技指導142名(55.9%)、奉仕作業108名(42.5%)、交流学习90名(35.4%)、講義・講演等が81名(31.9%)であった。

奉仕作業を希望するは福祉系の方に多く見られた。講演講義や2種以上を希望するは、教育系の方に多く見られた。

活動予定内容



活動予定内容



14 高齢者活用全般についての意見

※ () の数字は回答者の所属団体：(1)老人クラブ (2)婦人会 (3)小学校 (4)障害者施設
(5)児童施設 (6)老人施設

〔現状についての意見や感想〕

- ・地域社会のなかで高齢者自ら活動することが無言の遺産として次世代にのこる(1)(3)
- ・現代の若者にない年輪と機械に頼らず手足を使って働く尊さが子供に実感として伝わり、教育上重視している。(3)(3)
- ・我々の町では「老人大学」ではなく「朗人大学」を設け、各分野で熟知している朗らかな高齢者の人に運営委員になってもらい無報酬で講師をしてもらっている(1)
- ・この地方ではまだ高齢者の活用の範囲も知られていないし、指導者として頼める人はなかなかいない。そのため他の町から人を招くことの方が多い(1)
- ・老人クラブの自主運営の定着化のための能力活用がまず重要と思う。(1)
- ・活用という字句に不快感を覚える。当会は老人会より自主的に作業していただいているのでなおさらその感が拭えない。各種会議に老人会の代表が出席されているが、時代の波にのりかねているように思われる。(2)
- ・児童と老人の交流ができる場がもっと必要だが、予算がなく学校では事業ができない。年間に特別の会計として県の方からの補助や助成があればもっと生きた活用の場が設定できると思われる。(3)
- ・ゲートボウルやグランドゴルフを町老人会で開催し、その際高齢者相互で研修を行い資質の向上につとめている(1)
- ・私たちのところでは個人に直接依頼する方が便利(2)
- ・農家の高齢者に実技指導を受ける機会を考えています(2)
- ・ボランティアの方の事故の補償、或は途中でお断りする場合などいろいろな問題が生じると思い懸念している。また感情の行き違いによるトラブルも心配している。(5)
- ・シルバー人材への登録はまだまだ少ないように思う(1)
- ・エイジレス社会を知ってもらおうとこの事業の果す役割は非常に重要である(5)

〔要望や希望に関する意見〕

- ・もっと高齢者の貴重な体験や技能を活かし、伝承させてほしい(4)(3)(4)(3)(3)(2)(4)(3)(3)
- ・知識や技術を次世代に引き継いでいくためにもこの事業の推進をもっとはかってほしい(2)(3)(3)(4)(2)(4)(6)(1)(5)
- ・もっとひろく県民に能力活用事業をPRしてほしい(3)(2)(2)(3)(4)
- ・パイプ役となってくれる機関がもっとPRしてほしい(4)(3)
- ・内容のより具体的な紹介がほしい(1)(5)(3)
- ・地域の学校行事にもっと参加して、児童と高齢者の交流の場をもっと増やしてほしい(3)(3)(3)(3)(3)(3)
- ・この事業が高齢者の意思を十分に尊重され、世代をこえての「共生社会」の創造に寄与されるよう切望する(4)(3)
- ・高齢者の知恵や経験を活かし、料理や家事全般にわたって教えていただけたらよいと思う(2)
- ・よい講師を安く提供してほしい(1)
- ・コンピュータなど新しい機器が使える高齢者を養成してほしい(1)
- ・話し方や相談技術の研修をもっと行ってほしい(3)

- ・話術は下手でもよいから、実技をもった人の体験談をもっと聞きたい(1)
- ・きちんとした高齢者活用の規準（体力、知力、技能等）を職種によって設けてほしい(6)
- ・ボランティア活動においては、交通費や昼食代程度は補助してほしい(5)
- ・趣味の活動をされている方で園生に指導して下さる方がおられれば教えてほしい
（例 腹話術、人形劇、等ボランティアで）(4)
- ・実技指導は複数の方でやる方が気を使わなくてもよい(2)
- ・シルバー人材センターの方はもっと責任感をもって活躍してほしい(6)
- ・仕事のより好みはせず、積極的就業できる人材をのぞむ(1)

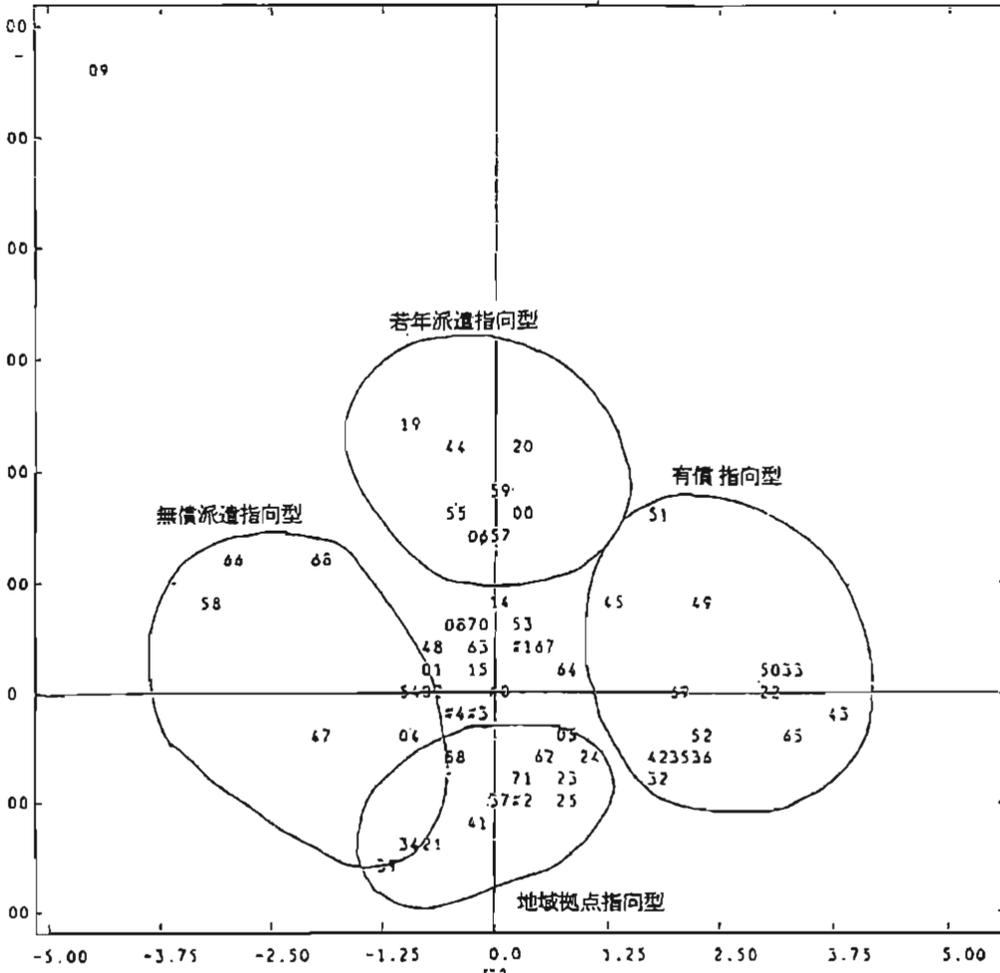
〔能力活用事業の進め方に関する意見またはアイデア〕

- ・郷土の特性を生かした活動を展開する必要がある(3)(4)
- ・高齢者がもっと働けるような職場開発を考えるべきときがきている(2)(1)
- ・レクリエーションやスポーツをしながらの能力活用を考えてはどうか(1)(6)
- ・もっと人材センターの活用を考えるべきである(2)
- ・高齢者にたいして市町村は農地をもっと提供できないか(2)
- ・各自自治体で高齢者向け発行の手帳に能力活用の項目を詳細（資格等）に記するよう依頼したらどうか(1)
- ・福祉分野での能力活用をもっと考えるべきである。ただし、老人ホーム等での本来業務への参加より、文化クラブ等の支援を考えるべきであろう。もちろん人によっては、介護ヘルパーも可能であり各施設内でそのような相談をうけつけてくれるところが必要となろう(6)
- ・保母や調理の人たちの勤務時間の短縮に伴い、それを補完する仕事に能力活用を生かせないか(5)
- ・各団体ごとに人材データバンクを整備すべきでないか(3)

〔需要側〕の能力活用に対する捉え方と地域性との関連について

需要側からみた「能力活用事業」に対する捉え方については、ここでは各団体の調査結果を取り上げ、それぞれの項目を多変量解析（数量化Ⅲ類）した場合、大きく4つの類型が浮かび上がってきた。それらは有償性と無償性の軸と派遣指向の軸との関係で整理することができ、有償（有能）指向型、無償派遣指向型、地域拠点指向型、若年派遣指向型、であると云える。（図-3）それらの分布にはそれぞれ兵庫県下の7つの地域（神戸、阪神、東播磨、西播磨、丹波、但馬、淡路）が含まれており、それらを浮かび上がらせると（図-4）のようになる。図-3の数字はアイテムカテゴリ変数の表を参照されたい。

図-3

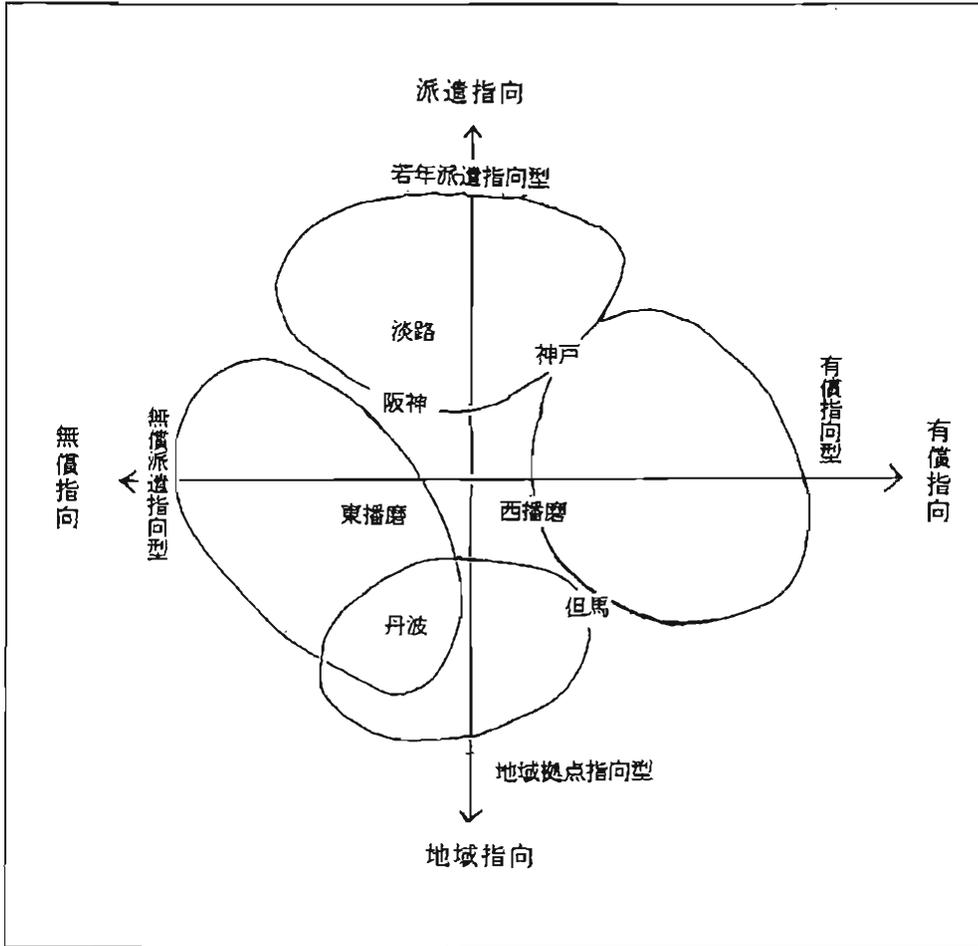


(相関係数 0.358 累積寄与率 28.5%)

図-4

〈需要・団体〉

能力活用のパターンと地域性



第 3 章

高齢者の能力活用の展望と課題（考察と提言）

1 「高齢者能力活用事業」の課題と展望

高齢者の能力活用を開発し促進させるためには、少なくとも次の4つの要素が十分に機能しなければならない。それらのキーワード（要素）とは「情報」「人材」「活動の場」そして「仕組みづくり」である。これら4つはお互いに関連しあっており、総合的に考察していかなければならない。これら4つ中で、今後重要になってくるのは、4番目の「仕組みづくり」である。今回大きく2つの領域、「供給側」（一般高齢者）と「需要側」（各種団体）に分けてその実態把握とその分析を試みたが、それぞれの側から現在の「高齢者能力活用」問題と課題が提示されている。それらの問題や課題をここに示した4つの要素から整理してみたい。

「情報」に関しては、現在兵庫県高齢者生きがい創造協会の能力活用のための人材登録の情報誌が、県民の家庭（個人）のレベルから各種団体や企業のレベルまで十分に活用されていないことが指摘された。この人材バンクの情報誌を今後より地域社会に普及させていくためには、よりわかりやすく、しかもより地域や職場に密着した工夫がなされなければならない。そのためには団体個々の高齢者人材バンクを充実させることも検討される必要があるだろう。各種団体の特性にあった人材情報誌が開発されることによってそれらがやがてデータベース化されることを期待したい。今回の調査からも浮き彫りされたように、今後はできるだけ地域社会に即したかたちで情報が提供される必要がある。供給側も需要側もできるだけそれぞれの地域のなかで人材を整えようとする傾向がみられた。

「人材」に関してはその発掘に相当の努力を払う必要がある。健康でありながら参加の機会がなかったり、自らの能力に気がつかないでいる高齢者がまだまだ地域で埋もっていると思われる。参加のための動機付け等、積極的な行政や各団体の働きかけが必要である。

この人材に関して注目しなければならない点は、人と人とをむすび付けたりさまざまな能力をもった人材を発掘したりできる能力をもった、いわゆるオーガナイザーと呼ばれる「地域の高齢者のうごきの見張り番」がますます必要となってくる。この人に尋ねれば、地域のどこにどのような能力をもった高齢者がいるという情報が得られるというように、地域の高齢者能力に関する情報提供と調整ができる人材を開発する必要がある。そのためにも地域のなかで情報が得られる「場」（や「組織」）が重要になってくる。

「活動の場」には実際の能力活用を實踐する「場」と上記で指摘した情報提供できる「場」の2つある。前者は、地域社会に存在している公民館や老人福祉センター、などの地域社会づくりの拠点から、神社仏閣の境内や公園や小学校のグラウンドといった場所が含まれる。今それらの「場」の再活用を考える必要がある。それは同時に後者の情報提供の「場」のあり方とも関連している。なにもいきなり地域社会に高齢者の能力活用のための専門機関がつくられなくとも、いまの資源の活用方法を地域で練る必要がある。

第4の「仕組みづくり」が最も重要な検討課題と考える。高齢者の社会参加には地域性とも関連するが、大きく3つのパターンがある。一つは老人作業所のように①拠点型と、老人クラブや社会奉仕、婦人会活動といった②既存組織活用型、そして3番目は③人材派遣型である。③の人材派遣型は有償性を主眼においたシルバー人材センターと生きがい創造協会が行っている能力活用事業のように奉仕性をおもきにおいた能力銀行型とわかれている。

これら3つのパターンは地域社会の特性とも関連しあいながら今後も根付いていくものとおもわれるがそれぞれのパターンの改善がなされなければならない。兵庫県の場合、今回の調査

できらかになったように、能力活用のパターンと地域性との関連では大きく4つの型が存在している。有償指向型、無償指向型、若年派遣指向型、そして伝統的な地域拠点指向型といったそれぞれの地域の特性にあった能力活用のための「仕組みづくり」が検討されなければならない。

そのためにも行政の果たすべき役割は今ますます重要になってくるものとおもわれる。

2 行政の対応について

いうまでもなく、行政が高齢者の能力活用を促進させていくためには、まず「なぜいま高齢者の能力活用（評価）が重要か」について、いままでの高齢化対策の基本的なあり方（理念）と合わせながら再検討する必要がある。

高齢者の能力をどうみていかなければならないか、「活用」ではなく「評価」または「開発」とすべきではないだろうか。

いずれにせよ、行政は基本的に上記で示したように、まず「場」の確保のための施策と「情報」の提供ができる体制の充実が急がれる。そして「人材」の確保が次に重要になってくる。この問題は先にも示したように、高齢者の能力開発のための「オーガナイザー」の養成をどう組織化していくかにかかっていると思われる。このオーガナイザーの養成は民間企業のノウハウを借りる必要がある。しかも今後はシルバー人材センターのような人材派遣型のオーガナイザーと能力活用事業のような能力銀行型のオーガナイザーの両方の育成が課題となり、やがてはそれらを統合できるオーガニゼーションのあり方が重要になってくるものと考えられる。

今こそ21世紀の高齢化社会を先取りした柔軟でしかも着実な対応がなされなければならないであろう。

（付：本研究は平成4年3月財団法人兵庫県高齢者生きがい創造協会刊「高齢者の能力活用の現状と課題についての調査研究」報告書（執筆責任者 桂）の一部を改編加筆したものである。尚この調査研究は、本協会の支援はもとより、兵庫県下の関係各位の調査協力によって達成されたもので、改めて関係各位に対し謝辞を付記したい。）

SUMMARY

The purpose of this study is : to (1) find out actual the problems and tasks in development of Aged people's capability for social activities, and (2) explore the problems characterizing these application systems.

Two surveys were conducted in 1991. The first survey which was conducted from the 'Supplier Side', involved 318 extracted old peoples who are ready to contact with some chance to use their capability for activities. The second one was conducted from the 'Demander Side', surveying 254 institutions concerned with education and welfare.

As for the major findings, the most frequent requests for programs by the aged were 'how to get informations concerning the chance to use their capability smoothly in small communities' and 'how to contact more easily the institutions serving the supplying side.

The tasks of the government side were 'to establish new systems of supplying programs', which takes in consideration especially as the characteristics of each community.

Considering the future of the aging society and the necessity of life-long education, the government side should further endeavor to develop and provide opportunities for older people to make use of their capabilities systematically, methodically and actively.